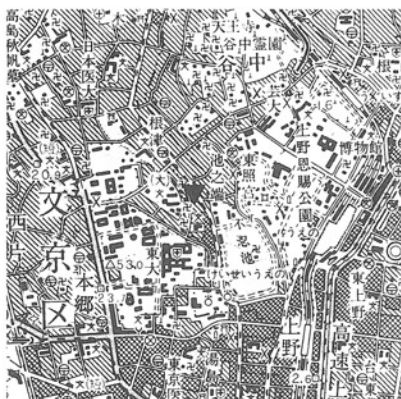




(東京東北部)

東京・池之端七軒町遺跡

- 1 所在地 東京都台東区池之端二丁目
- 2 調査期間 一九九三年(平五)八月～一九九四年三月
- 3 発掘機関 台東区池之端七軒町遺跡調査会
- 4 調査担当者 加藤晋平・小俣 悟
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

池之端七軒町遺跡は台東区の西端にあり、武蔵野台地東側上野台と本郷台の間の根津谷に位置し、不忍池の北西の緩斜面上に立地する。今回の調査は警視庁上野寮建設に伴うものである。

当地周辺は近世以前には池に面した湿地が広がっていたものと思われ、江戸時代に整地されて町屋が成立したものである。当地には寛永四年(一六七二)建立の曹洞宗慶安寺が所在して

いたが、大正年間に杉並区に移転し現存している。周囲には東隣に下野喜連川藩足利家上屋敷、北側には富山藩前田家中屋敷などが存在していた。慶安寺に関する記録には、文政二年(二八一九)頃編纂の『御府内備考続篇』、明治一〇年(二八七七)発刊の『寺院明細簿』曹洞宗があり、各々境内図を掲載している。

検出遺構は、伽藍を構成する建物の基礎、井戸と繋がる竹樋を有する小溝、廃棄坑、墓坑、地業としての整地層である。主要な建物基礎は敷地西側と中央南側で検出され、境内図と対比すると「庫裏」と「本堂」に対応する。墓域は南側に広がっている。低地に形成された遺跡のため木製品・木材などが良好に遺存している。

墓域は南東部と南西部の主に二地点に分かれ、大まかに四期に区分される。Ⅰ期が一七世紀末～一八世紀初頭、Ⅱ期が一八世紀前半、Ⅲ期が一八世紀後半、Ⅳ期が一八世紀末～一九世紀後半と推定され、Ⅰ期は南西部を中心とし、Ⅱ期に南東部にも広がり、Ⅲ期には南西部が断絶し、Ⅳ期が北側へと広がる。埋葬形態としては、土葬の場合、甕棺・方形木棺・円形木棺(早桶)などがあり、火葬では陶磁器・土器などの蔵骨器が見られる。

埋葬施設からの出土遺物は多量であり、しかも木製品も多いため未整理のものもあり、今回紹介できるのは報告書に掲載したものと、紹介したものの詳細は未掲載の墓誌一点(20)のみである。この他に多数の木製塔婆などの墨書が出土している。なお今回、報告

書掲載分のもについて、一部釈文などを改めたところがある。

8 木簡の釈文・内容

三六八号遺構

(1)	・「玉将」	35×28×9	061
(2)	・「金将」	31×26×10	061
(3)	・「銀将」		
	・「金」	27×26×8	061
(4)	・「飛車」		
	・「龍王」	32×27×10	061
(5)	・「角行」		
	・「龍馬」	33×29×10	061
(6)	・「桂馬」		
	・「金」	28×26×9	061
(7)	・「香車」		
	・「金」	28×21×8	061
(8)	・「歩兵」		
	・「と」	26×20×7	061

五四七号遺構

(9) ・「」 (側面)

・「三斗六升入」

」 (底面)
上径500×下径430×高530 061

四五七号遺構

(10) 「十方佛土中」
「裂」
〔来カ〕

径610×厚20 061

六〇四号遺構

(11) ・「」 前」

・「慶寿院積室妙善比丘尼
寛政八丙辰年七月
廿三カ辰之カ」

径495×厚10 061

六四六号遺構

(12) ・「く宝永八辛卯天
奉順礼秩父三十四所同行七人
中山氏妻女」

・「。南無阿弥陀佛」

158×40×2 011

五二三号遺構

(13) 「前」

径540×厚30 061



(3)



(2)



(1)



(6)



(5)



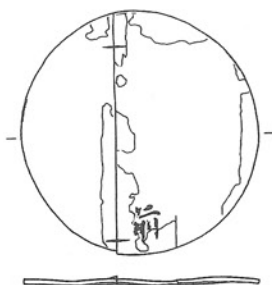
(4)



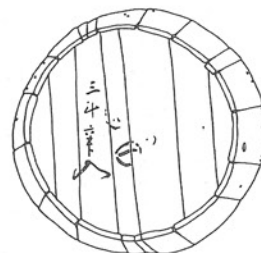
(8)



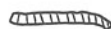
(7)



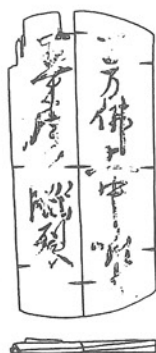
(11)



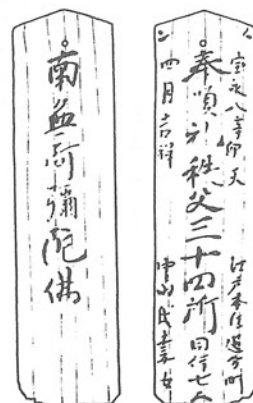
(9)



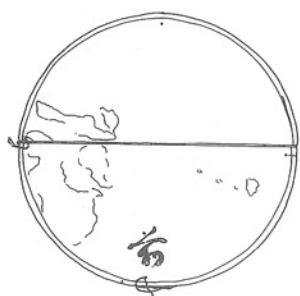
(17)



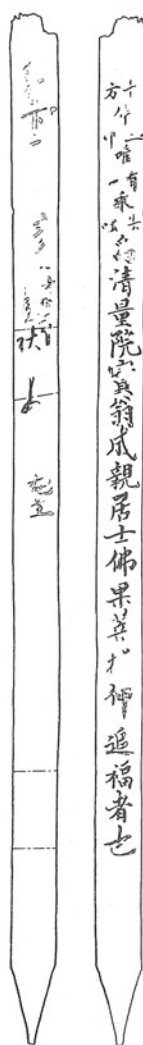
(10)



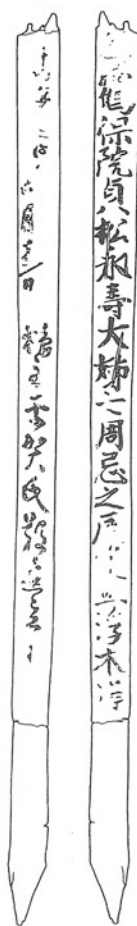
(12)



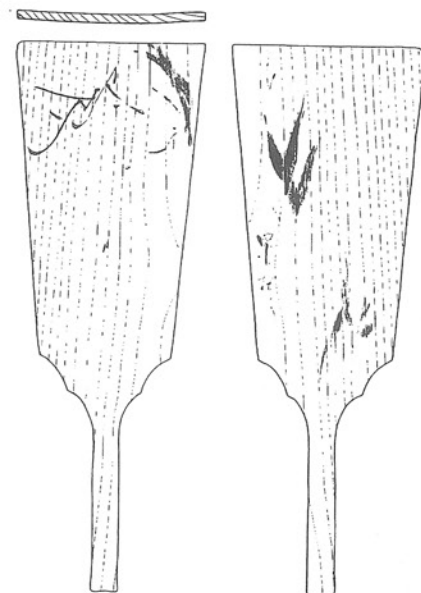
(13)



(14)



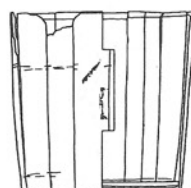
(15)



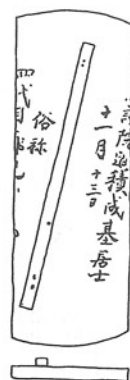
(19)



(16)



(18)



(20)

- (14) 十[・]二[・]唯^一有[□] 為清量院宝翁成親居士佛果苦[□]伸^{〔提カ〕}追福者也[〕]
 方[□] 施主^{〔六カ〕}
 下[□] 施主[□]
 1648×72×8 061
- (15) 保院貞松永寿大姉七周忌之[□]浮木[□]
 六月十三日 施主平賀氏[□]
 1444×62×8 061
- (16) 光院玄室[□]大[□]三[□]高[□]顯[□]
 〔姉カ〕周忌之カ〕
 1312×70×10 061
- (17) 六四〇号遺構
 61×25×2 011
- 五四一号遺構
- (18) 上径360×下径310×高350 061
- 六〇七号遺構
- (19) 363×120×10 061

遺構外

(20) 〔×□院道積成基居士
 十一月十三日

俗称

四代目[□]□□□□×[〕]

6673×24 061

(1) (8)は長方形木棺の副葬品で、方形の木製駒入れに入った将棋の駒一組分。他にキセルなどがあり、被葬者は男性と推測される。

(9)は円形木棺に転用されていた桶で、側面と底面に墨書を有し、また底面には焼印も見える。底面の墨書「三斗六升入」から本来は酒か醤油の樽と推測される。

(10)は円形木棺の木蓋。櫛などが副葬され被葬者は女性と推測される。(11)は甕棺の木蓋。表面に埋葬方向である「前」、裏面に墓誌が墨書されている。内容は妙善比丘尼が寛政八年(一七九六)七月(廿三日か)に死亡したということである。副葬品に扇の木製柄があり、副葬品からも被葬者は女性と判断される。

(12)は円形木棺の副葬品で巡礼札である。「宝永八辛卯天」の「天」は「年」のことであり、宝永八年(一七二一)に本郷追分町(現・東京都文京区本郷)の中山氏妻女が秩父巡礼に行った時のものである。他の副葬品に櫛があり、被葬者は女性と推定され、「中山氏妻女」に該当しよう。巡礼札が副葬されていることからあえて推測す

れば、被葬者は巡礼前後に死亡したとも考えられる。

(13)は甕棺の木蓋で、(14)~(16)はその方形木槨に転用された木製塔婆である。(15)は七周忌の追善供養のために、(16)はかなり不明瞭であるが、三周忌の追善供養と推測される。副葬品に櫛があり、墓誌から被葬者は女性と判断される。

(17)は甕棺の副葬品である木札に梵字を墨書したものである。上段に「[bhai (薬師如来)」、右に「[nirā (阿弥陀如来)」、左に「a (大日如来・弥勒菩薩か)」を書く。副葬品に櫛があり、被葬者は女性と推定される。(18)は円形木棺に転用されたと推測される桶の側面に墨書したものの。(19)は方形木棺の副葬品である羽子板に墨書しており、被葬者は女性と推定される。(20)は木蓋に墓誌が墨書されている。工事立ち会いにより出土したもので、埋葬形態などは不明であるが、近接して出土した石蓋が、その墓誌から同一の埋葬施設に使用されたものと推測されるため、甕棺の蓋と判断される。

人名を記しているのが(11)(20)の墓誌、(14)(15)(16)の木製塔婆、(12)の巡礼札であり、(19)の墨書も女性名と推測されるが不明である。

(20)の被葬者は、石蓋の墓誌「誠泰院安政五戊午歳十一月十三日卒 俗称 都筑十左衛門成基」から、本名を「都筑十左衛門成基」といい、「成基」を戒名としても使用している。また五二三号遺構の被葬者も、甕棺の石蓋の墓誌「都筑家六代十左衛門妻 瓊臺院 文久二戌年 七月六日」から都筑氏である。慶安寺檀家の「都筑氏」は、

徳川幕府の御家人として江戸町奉行の与力職の家柄で、近年その子孫から「過去帳」などの史料が江戸東京博物館に寄贈された。「過去帳」などからは都筑氏が名前に「成」を通字としていることがわかる。(14)の「成親」は戒名であるが、(20)から類推すると、「成親」が元来本名である可能性が高く、「成」を有することから都筑氏一族の人物と推測される。よって同じ五二三号遺構に使用されている(15)(16)の供養対象者も、都筑氏一族と思われる、成人女性であるからおそらく嫁であろう。(15)の裏面に見える施主の「平賀氏」が実家とも推測される。

また(11)の墓誌は都筑氏の「過去帳」に見える「慶寿院積室妙善比丘尼 寛政八丙辰年七月 御俗名芳子小笠原長道妻并幻影童子之母」に一致し、この被葬者も都筑氏一族と判断される。ちなみに(11)の六〇四号遺構は、五二三号遺構に近接している。

9 関係文献

台東区池之端七軒町遺跡調査会「池之端七軒町遺跡調査報告書(慶安寺跡)」(一九九七年)

台東区池之端七軒町遺跡調査団(小俣 悟・里見雅仁)「近世寺院跡の調査」『季刊考古学』五三(一九九五年)

小俣 悟「池之端七軒町遺跡」『江戸遺跡研究会第九回発表要旨 江戸時代の墓と葬制』(一九九六年) (小俣 悟)